

現地の素材を生かした社会科の授業づくり

— 日本とサウジアラビアの違いや共通点にポイントをおいて —

前ジェッダ日本人学校 教諭

北海道釧路市立朝陽小学校 教諭 松本 孝也

キーワード：社会科，現地理解，授業づくり，日本との違い

1. はじめに

サウジアラビア王国は、イスラム教の聖地マッカ（メッカ）・マディナ（メディナ）を有するため、周辺のイスラム教諸国よりも戒律が厳しい。また、現在は少しずつ改善されてきているが、治安が安全であるとはなかなか言い切れない部分もある。さらに、ジェッダは紅海に面しているため高温多湿な気候でもある。夏には気温が40℃を超える日も珍しくない。このような要素があるため、なかなか現地理解を進めていくことが難しい側面もあったが、現地日本人会の協力などを得ながら、毎年数回の現地理解教育を行ってきた。

また、現地理解をより深いものにするために、サウジアラビアやイスラム教の文化をある程度おさえたり、アラビア語の研修を進めたりもしながら、サウジアラビアの文化や生活をのぞき、日本の暮らしとの違いをおさえる授業づくりを行った。

2. 日本との違いを生かした授業づくり

3・4年生の社会科の学習は、『地域』に着目して学習を進めていくため、今まで住んでいた地域（日本）と現在の生活とを比較させながら学習を進めることが可能であった。3年生では『人々のしごととわたしたちの暮らし』（東京書籍）・「スーパーマーケットではたらく人」の部分で、4年生では、『住みよいくらしをつくる』や『きょう土につたわるねがい』・「古い道具と昔の暮らし」の部分で、サウジアラビアの文化や生活をのぞき、日本の暮らしとの違いをおさえていく授業を行った。

(1) 「買い物はどちらがしやすいだろうか？」（3年：『スーパーマーケットではたらく人』）

サウジアラビアには数多くの品物をそろえた大型スーパーがあり、日本人家庭のほとんどがそのスーパーを利用している。そこで、この単元では、サウジアラビアと日本のスーパーの違いを見つけるために、『どちらが買い物しやすいか？』という課題からスタートし、家庭にアンケートをお願いして調査活動を行った。

子どもたちは、学校行事の際に買い物にも行っているため、サウジアラビアのスーパーの大きさや品物の数の多さ、日本との買い方の違いなどがある程度おさえていたが、改めてアンケートを行ったことにより、数多くの違いを知ることができた。また、違いをおさえる中で日本のスーパーの良い点を数多く見つけ出したり、システム（発注・輸送など）の素晴らしさに驚いたりもした。さらに、『鮮度』という点では、日本とサウジアラビアでは大きな差があったので、児童は、「なぜ、日本の野菜や魚は新鮮なのか？」という課題を自ら作り上げ、熱心に調査することができた。

(2) 「ゴミの捨て方の違い」（4年：『ごみのしょ理とりよう』）

この単元では、まず、サウジアラビアではゴミの処理がどのように行われているのかについて調べる活動からスタートした。家から出たゴミは、道端にあるゴミ捨て場に集められ、ゴミ収集車によって運ばれるところまでは簡単に追求できたが、「日本ではゴミを分別しているのに、サウジアラビアでは全部一緒に捨てている」という違いを発見

し、ゴミの捨て方の違い・ゴミの行方を調べていくことにした。(サウジアラビアでも近年リサイクルが始まり、ビン・カン・ペットボトルを分別するようになってきているが、日本とは大きく違う) 残念ながらゴミが捨てられているところを見学することはできなかったが、記録写真を探っていくと、サウジアラビアでは航空機の機体までも一緒に捨てられているという衝撃的な写真を見つけ、日本との大きな違いを知ることができたとともに、『サウジアラビアは国土が広い(土漠や砂漠がたくさんある)から、このようなことができるが、日本は国土が狭いので、同じことはできない。だから分別やリサイクルをすること、ゴミを減らすことが大事である』という結論にも達した。「ゴミの捨て方の違い」を入口として、「ゴミを減らすことや分別・リサイクルの大切さを知る」という部分にまで到達させることができた。

(3) 「なぜ、水を飲まないの?」(4年:『水はどこから』)

『水はどこから』では、「日本の水(蛇口から出る水)は飲めるけど、なぜ、サウジアラビアでは水(蛇口から出る水)を飲めない(飲まない)の?」という問いからスタートし、日本の上水・サウジアラビアの上水、それぞれについて「水の旅」を調査した。

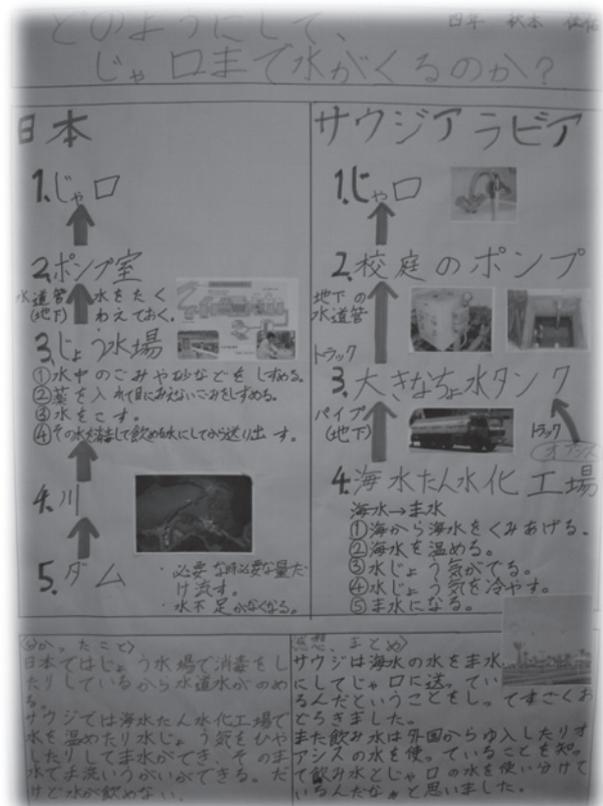
サウジアラビアでは、水は大変貴重なものである、時期によっては水不足にもなり、学校も断水することがしばしばあった。しかし、上水は完備されており、学校や各家庭には日本同様に数多くの蛇口がある。ところが、飲み水は必ず購入しているため、その部分に着目させ、「水はどこから」「どのような方法で」運ばれてくるのか。そして、「飲める・飲めない(飲まない)の差は何なのか?」を探る学習活動を行った。

まずは、学校の水がどこから、どのように来ているのかを調べることにした。ここでは、現地職員のアフメド氏にインタビューしながら調査する方法を取り、学習で身につけてきているアラビア語や英語での会話も取り入れながら、学校内の水の通り道をおさえた。校外の部分に関しては、ジェッダ日本人学校が持つ副読本『わたしたちの住むサウジアラビア』を使って調べたが、古い資料であったため、内容をアフメド氏に確認したり、実際にアフメド氏と校外に出て、水の通り道を教えてもらったりしながら調査活動を進めた。先にも述べたが、水はこの国では非常に大事なものであるため、貯水場などは大変厳しい警備がおこなわれていた。

子どもたちが一番驚いたことは、学校の水(サウジアラビアの上水)は海水から作られていることであつた。海水淡水化工場という水を作る大きな工場がジェッダにはある。普段は何気なく見ていた工場だが、ジェッダ市民にとっては欠かすことができない工場であることが分かった。「ジェッダには川がないから、わき水を集めているのではないか。」という予想を立てていたの、衝撃も大きかったのではないかと思われる。

日本については教科書を中心に調べ、浄水場で繰り返し消毒されたり、検査が行われたりしていることに着目した。ここにポイントがあるかもしれないということで、ジェッダにある海水淡水飲料水化工場(SAWACO)へ見学に行く際に確認することになった。

この工場では、海水を飲料水に加工し、トラックで運んでいる。作られた水は、コンパウンド(外国



人集合住居)では飲み水として使われたり、ジュースの原料として使用されたりしている。見学をしていく中で、海水がどのように真水になるかについて知ることができたとともに、「検査」や「消毒」がしっかりと行われていることを知ることもできた。

子どもたちは、見学を行うことによって、ジェッダの水事情を知るとともに、飲料水になるかは、日本と同様「検査」や「消毒」をしっかりと行っているかどうかという部分で決まってくることもわかったのではないかと考えられる。

この単位では、サウジアラビアの水について学習を深めながら、日本の浄水場についても関心を持って学習を進めることができたのではないかと感じている。また、学習の最後には、「日本でも海水を真水する工場があること」を見つけ出したり、現地(サウジアラビア)人の中には、日本同様、蛇口に浄水器をつけて飲んでいる人がいることを聞いたりするなど、学習の発展や深化にもつなげることができたことも良かった。

3. 日本とサウジアラビアの共通点を大事にした授業づくり

サウジアラビアの文化を調べていく中で、日本との共通点を数多く見つけることができたので、「共通点」を大事にした授業づくりができないだろうかと考えてみた。生活の仕方や習慣、建物や道具など、見た目は日本と大きく異なることが多いが、思いや願い、工夫や苦勞という部分では共通点が多くある。その部分を生かした授業づくりを試みた。

サウジアラビアの昔の道具(4年:『古い道具と昔の暮らし』)

『古い道具と昔の暮らし』では、「古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子」などを調べるために、サウジアラビアで使われていた道具について調べる学習からスタートさせた。日本の古い道具は、なかなか手に入らないという現状もあるが、現地理解を進めていくことができる機会とも考えた。

導入には、子どもたちが見たことがある道具であり、ベドウィン(アラビア半島で昔からの生活を変えずにいる人々)の生活で使っている道具(写真①・②)を提示し「これは何だろう・何に使う道具だろうか?」という問いかけから切り込んでいった。子どもたちは、見たことがあるが、注意してじっくりと見たことがないため、まずは、副読本『わたしたちの住むサウジアラビア』を使って調べてみた。しかし、副読本では「マバハラ(写真①)」「ダッラ(写真②)」という名前だけしか分からず、使い方や何のために使っているのかは謎のままであった。

そこで、現地職員(アフメド氏)にインタビューしながら解決する方法を、ここでも利用し、現地理解を進めるため解決方法の一つとして定着を図ることも試みた。また、アラビア語を活用する機会としてもとらえて行うことにした。

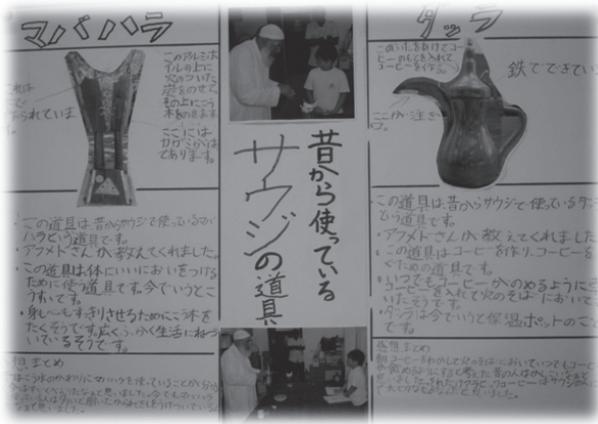
アフメド氏とは、事前打ち合わせで、「何のために使われているか。」「今、この道具に変わるものは何か。」の2点について必ず話をしてもらうようにした。これは、昔の道具に注目するだけでなく、道具はより便利なものへと移り変わっているということも一緒におさえたかったからである。



写真①



写真②



実際にインタビューした時も、マバハラを使って香木をたいてもらったりするなど、その場で使い方を実践してもらったので、貴重な体験にもなった。子どもたちの関心も大変高いものとなり、マバハラを土産として日本に買って帰ったり、日本の昔の道具調べにも意欲的に取り組んだりすることができた。

また、日本の昔の道具を調べる際にも、「今はどんなものになってきているのか。」という点や、日本でもサウジアラビアでも道具が便利になっているという共通点を見つけ出すことができた。

海外の地では、日本のように必要な教材がなかなか手に入らないが、現地のもを上手に教材化することができれば、子どもたちに高い関心を持たせながら、学習のねらいをおさえた授業づくりができることがわかり、自分自身にとっても大変貴重な経験となった。

4. おわりに

社会科の学習を通して現地理解を進めるためには、子どもたちに「目」を持たせることが大事になることがわかった。その手段として、まず「身近なものの謎を解くこと」・「日本とサウジアラビア（現地）との違いを見つけること」などの方法をとったが、それを継続していくことで現地の人・もの・ことに「目」が行くようになるのではないかと感じている。その「目」を子どもたちが持つと、興味や関心が広がり自らいろいろな疑問を持つようになり、他教科での現地理解に広がったりするようになると思われる。また、総合的な学習の時間の中でプランを立てて現地理解を進めることも一つの手段ではあるが、教科の中に取り組みながら進めることを繰り返し、そして継続的に行いながら進める方法も、ジェッダ日本人学校のような少人数の学校には適しているのではないかと感じた。（少人数指導ができる。教科の時間に余裕があり、発展的な学習を扱いやすいという理由から）

子どもたちの理解を深めたり、興味を広げたりするには、「単元の導入で如何に引き付けるか」ということが最も大事になってくると考えられる。そのためには、その国の素材を有効的に活用して教材にしていくこと、その国の人とのつながりを大事にしていくことも重要になってくる。

今回は4年生の社会科の学習を中心に現地理解を意識した授業づくりに取り組んだ。この授業を通して、子どもたちはサウジアラビアのことを少し知ることができたので、これが「もっと知りたい」そのために「もっと調べたい」という気持ちに育って行って欲しいと願っている。